

# 第48回「てのひら文庫賞」

## 読書感想文全国コンクール

文部科学大臣賞 作品

文部科学大臣  
最優秀賞

4年・自由図書部門／読んだ本―じゅげむの夏

### 「じゅげむの夏」を読んで

愛媛県四国中央市立中曾根小学校 齋藤花

夏休みに入ってすぐ、弟が生まれました。生まれたての赤ちゃんは、小さくて、フニャフニャで、毎日色んな表情を見せてくれます。まだ外出ができないので、私も家で過ごすことが多く、宿題をしたり本を読んだりしています。赤ちゃんと過ごす夏休みは、楽しいけれど、ちょっとたいくつだなと思います。そんな夏休みに読んだこの本は、仲よしの少年四人が夏をめいっぱい楽しむ物語でした。本の表紙を見るだけで、夏のまぶしい日ざしを感じたり、セミの声まで聞こえてきたりするようで、とてもわくわくしました。

この本に出てくる少年四人は、私と同じ小学四年生です。心配性で気の小さいぼくと、ひょうきんでノリのよい山ちゃん、どんな所でもねころがるくせがあるシューちゃん、難病をかかえながらも明るくたくさんの夢を持って生きているかっちゃん、山あいの村の同じ集落に住んでいます。筋ジストロフィーのかっちゃんが、夏休みにやりたいことを宣言し、四人でいっしょに挑戦するお話です。

私が一番心にのこったのは、かっちゃんが集落にある天神橋から川に飛びこむ挑戦でした。集落の子ども達が代々受けついできたならわしで、三年生くらいまでにはみんなその儀式を行います。かっちゃんは、けがや病気をすると筋

ジストロフィーの進行が早まってしまおうと言われていて、川に飛びこむなんてもつてのほかなのに、「ぼくも飛びたいんだよ。来年になったら飛べなくなるかもしれないねえし。今年がラストチャンスって気がするんだよ。たのむ。」と三人にお願いし、決行しました。病気があってもやりたいことをあきらめない心を持っているかっちゃんはとても強いと思ったし、それをおうえんして一緒に成功させた三人の友達を想う気持ちが伝わってきて、私も心がドキドキしてうれしくなりました。かっちゃんが川に飛びこむのを成功できたのは、三人が助けってくれたからです。一人ではできないことをささえてくれる友達はすてきだと思いました。四人で川岸の岩にねころんで空を見上げた時、だれも何も言わなかったけれど、言葉がいらないくらいみんなの心が満たされていて、気持ちに通じ合っていたのだと思います。私もそんな友達をつくりたいです。

この本を読んで、筋ジストロフィーという病気を初めて知りました。難病のひとつで、筋肉がだんだんやせて弱っていく病気で、立つたり歩いたり、物を持ち上げたり、生活するために必要な動きができなくなるだけでなく、進行すると、心ぞうや肺などの筋肉も弱っていくことで、こきゅうするす。

ことさえも難しくなるそうです。かっちゃんも、ひっくり返るのではないかというくらい胸をつき出して体を左右にふって歩きます。三人の友達は、それがかっちゃんのおふつうだと思っていて、何も気にかけません。どんなに歩くのがおそくても、かっちゃんはかっちゃんなのです。

村の山おくにある樹齢千年のおぼけトチノキに行こうと言い出したのもかっちゃんでした。本を読んでいると、手押しの一輪車にかっちゃんを乗せ、三人が交代しながらがたばこの農道や急な坂道を進んでいくすがたが見えるように思えました。

四人は、村に住んでいるじいさんから「無我夢中で生きろ。」と声をかけられました。やりたいことに挑戦した四人は輝いていて、うらやましくなりました。私の今年の夏は、外出はできなかったけれど、赤ちゃんをだっこしたり、ミルクをのませたり、今しかできない経験をすることができました。来年の夏はどんな自分になっていたか、どんな今を生きていて、どんな夢を持っているかな。四人から教えてもらった今を生きることを大切に、やりたいことやワクワクすることに挑戦する夏にしたいです。